

◆2021年12月第2週の礼拝説教

■日 時：2021年12月12日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」

■聖 書：新約 ガラテヤの信徒への手紙4：8-20（p347）

■讃美歌：241「来たりたまえ」・255「生けるものすべて」

待降節、第3主日を迎えました。

来週は、いよいよクリスマス礼拝です。

恒例であった礼拝の後の愛餐会は、昨年に続いて今年も出来ませんが、それでもコロナによる厳しい試練の中にあって、クリスマスを迎えられる喜びを神様に感謝したいと思えます。

来週は、ルカによる福音書からクリスマスのメッセージを聞きたいと思っています。

ところで、始めに、嬉しいお知らせをしたいと思えます。

高齢者施設に入居されたものの、ご家族の都合でどの施設に入られたのかが分からなかった方が、お連れ合いからのメールで施設の名が分かり、さらにコロナが落ち着いたら面会に行つて欲しいとまで言われました。

久しぶりに心が温くなるメールでした。報告の時間に詳しくお知らせしますが、本当に嬉しい知らせでした。面会が出来るようになりましたら、すぐにでも行きたいと思えます。1年半近くお会いしていませんので。

なお、私たちの信仰の友には、入居された施設名が分からず、心にかかっている方がお一人、入居先は分かっていますが、お会い出来ない方がお一人います。

このように、止むを得ず礼拝に出席出来なくなった方々にどのように対応したら良いのか、ご家族の事情もあり簡単な問題ではありませんが、これからもしっかり取り組みたいと思えます。

一方、今回ほど、イエス様の誕生を待ち望む思いが強くなっている時はありません。それと共に、福音が宣べ伝えられることの大切さを覚えた時もあります。この時こそ、私た

ちは、イエス様が教えた「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」との戒めを実践しなければならぬと思えるのです。先週、ある出来事を知らされ、知らなさ過ぎる自分を覚えました。今、この日本で、又ミャンマーで、何が起きているかをです。

突然ミャンマーの話題を出し、驚かれたと思いますが、私は現在、日本バプテスト連盟の東京バプテスト神学校で「アジアキリスト教史」を教えています。全10回で、第9回目となる先週の月曜日は、ミャンマーのキリスト教の歴史の授業であったことから、ゲストに日本で伝道をしているビルマ族の牧師先生をお招きしました。その方は、1988年に国軍のクーデターが起きた時、迫害から逃れて日本に亡命して来られました。語られた難民としての日本での悲惨な生活の様子も驚きでしたが、それ以上に、授業の中で見せて下さった現在のミャンマー国軍による民衆弾圧の写真は衝撃でした。一体人間とは何者なのかと問わずにはいられないほどのものでした。

ミャンマーの民主化を覚えるの祈りが毎週金曜日にオンラインで行われています。

チラシを入りに置いておきましたので、ご自由にお取り下さい。

一つだけ、この授業を受けた受講生のHさんの感想を紹介します。

(ゲストの)S先生にご紹介いただいた写真を見て、本当に心を痛めました。写真を見たあとしばらくの間は、「なぜ」という言葉しか出てきませんでした。あまりにも悲惨な状況なので、うまく感情を言葉にできませんが、いくつか思ったことを箇条書きにさせていただきます。

- 現状を知らなさすぎるということ。

ニュースでも盛んにミャンマーについては報道されていますが、現状がこれほど悲惨だとは知りませんでした。このようなことが現代において、しかもアジアにおいて行われているということが信じられません。しかもそれをクーデターが起こってから10ヶ月も経ってからようやく知るといことはなぜなのだろうかと考えさせられました。日本のマスコミが偏っているのでしょうか、それとも私が無関心すぎるのでしょうか。両方かもしれません。マザーテレサは「愛の反対は憎しみではなく無関心である」と言いましたが、キリストの愛に生きる者として、もっと世界の情勢をきっちり知ることが必要であると思わされました。

- 日本は安全だというのは幻想かもしれないということ。

我々は日本が安全だと思って生活していますが、本当にそうなのでしょうか。日本でも 80 年前は軍が大きな力を持っていました。憲法改正の動きもあります。ミャンマーで起こっているようなことは日本ではあり得ないと安心して良いのでしょうか。我々は今ミャンマーで起こっていることをしっかりと見つめ、我々の社会が間違った方向へ進んでいかなないように気をつけていかなければならないと思いました。

- 「最も小さい者の一人にしてくれたことは私にしてくれたこと」。

イエス（様）は「おまえたちはわたしが空腹であったときに食べ物をくれず、渴いていたときに飲ませず、わたしが旅人であったときに宿を貸さず、裸のときに服を着せず、病気のときや牢にいたときに訪ねてくれなかった。」（マタイ 25:42-43）と、のろわれた者どもが永遠の刑罰に入ると言いました。我々が隣人であるミャンマーの人々に何もしないということは、イエス（様）に対して何もお世話をしないことと同じだと思いました。

- 最後に（今日の講師の）S 先生自身が難民であったということ。

S 先生自身が前回のクーデターの難民であり、そして今回のクーデターに対して（抗議）活動する市民を日本から支えているという歴史の流れに感動しました。日本は少なくとも現状では安心してそのような（支援の）行動を取れる国であることは良いことだともいえますし、だからこそもっと多くの政治難民を受け入れていくべきなのではないかと思われました。

以上で

す。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉から学びたいと思います。

パウロに反対する律法主義者たちが、ガラテヤの人々を惑わし始めます。それに対し、パウロは断固として呼びかけます、パウロが教えた初めの福音に戻るようにと。

これらの敵対する人々は、実は、パウロと同じにユダヤ教からキリスト教に改宗した者たちでした。ユダヤ教を信じる人々がパウロに反対するのであるなら分かります。しかし、同じキリスト教徒でありながら、何故パウロに敵対し、ガラテヤの人々を惑わしたのでし

ようか。その理由は律法へのこだわりでした。パウロは、神様に義とされる手段としての律法を放棄します。律法をどんなに守っても、それによって神様の義は得られないと。神様に受け入れていただけるのは、ただ神様の恵みによるだけであると。

しかし、敵対者たちは違いました。信仰だけでは足りない。異邦人であるあなたがたは、ユダヤ人のように割礼を受け、律法を守り、ユダヤ人のように生活しなければ神様による義は得られないと教えたのです。8節。

8：ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました。

ガラテヤ地方は異教の地です。真実なるヤハウエの神様を知らずにいた人々は、土着の神々を祀り、拝んでいました。9節。

9：しかし、今は神を知っている。いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。

9節のこの御言葉は、大切です。私たちから神様を知ることは出来ません。神様が私たちを知っていて下さるのです。そして神様を知るための聖霊を送って下さり、それによって私たちは初めて神様を知ることが出来ます。

神様から知られた存在であると言うことは、どのようなことでしょうか。

新共同訳聖書 979 頁をお開き下さい。それは、ここで謳われているその現実にあると言うことです。即ち、

【詩編 139 編、979 頁】

それにもかかわらず、10節、ガラテヤの人々、

10：あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています。

日とは律法に定められた安息日であり、月とは特別な行事のある新月であり、時節とは過ぎ越しや仮庵の祭りであり、年とは7年ごとに巡って来る安息の年、それらを守っている。ですから、11節、

11：あなたがたのために苦勞したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です。

異邦人であるあなたがたに対し、あれほど苦勞して律法からの解放を教えたのに、あなたがたは律法への生活に囚われようとしている。だからこそ心配でならないとパウロは心の内を語ります。そして、改めて、ガラテヤの人々に語りかけるのです。12節。

12：わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします。あなたがたは、わたしに何一つ不当な仕打ちをしませんでした。

「兄弟たち、お願いします。」まるで、哀願するかのようなパウロの言葉です。このような言葉を聞くのは、パウロの書いた手紙の中では初めてです。「わたしもあなたがたのようになった」とは、ユダヤ人の全ての特権を捨てて、異邦人の世界に飛び込み、異邦人のように生活したことを意味します。律法では、異邦人の地に足を踏み入れ、再びユダヤ人の地に戻るためには、身を清めなければなりませんでした。異邦の地で穢れたためです。又、異邦人と食事を共にすることも許されていませんでした。身が穢れるためです。しかし、パウロは、それら全てを否定し、異邦人の地で、異邦人と交わり、異邦人と食事を共にし、異邦人のように生活をしました。だからこそ、あなたがたも、律法の奴隷になるのではなく、私のように、律法から自由な者となって欲しいとの痛切な呼びかけなのです。

そして、彼らガラテヤ人がパウロに示した心からの友愛を思い起こさせます。13, 14節です。

13：知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました。

14：そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスでもあるかのように、受け入れてくれました。

パウロがどのような病を抱いていたかは分かりません。眼の病いか、頭痛か、癩癩か、い

ずれにしても、相当の重い持病を持ち、痛みや発作が始まると、人々から忌み嫌われてもおかしくない状態になりました。しかし、ガラテヤの人々は、そのようなパウロを「神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスでもあるかのように、受け入れ」たのです。

その結果、パウロとガラテヤの人々との間には、深い信頼と愛情が生まれました。それは、たとえ自分は犠牲になってもパウロのために尽そうとまでするものでした。しかし、今は、かつて人々が示したパウロへの思いを見出すことが出来ません。その思いは一体どこへ行ってしまったのかとの嘆きです。15 節。

15：あなたがたが味わっていた幸福は、いったいどこへ行ってしまったのか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してわたしに与えようとしたのです。

そしてパウロは、最初の教えから離れようとしているガラテヤの人々にその理由を問い、律法主義者たちの本当の狙いを明らかにして行きます。16、17 節です。

16：すると、わたしは、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのですか？

17：あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。

さらに、パウロは自分の気持をそのままにガラテヤの人々に伝えます。

18 節から 20 節です。

18：わたしがあなたがたのもとにいる場合だけに限らず、いつでも、善意から熱心に慕われるのは、よいことです。

19：わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。

20：できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

パウロが、どれほどガラテヤの人々を愛しているかが分かります。

時には厳しく、時にはわが子を諭すように語っています。

ガラテヤ地方とは、使徒パウロが最初に伝道を行った土地で、そこに生まれた教会は初穂です。そのような人々が、最初の教えから離れて、律法主義者たちの教えに惑わされている。パウロにとって耐え難く、己が身が引き裂かれるような思いでした。自らの汗と涙と労苦によって耕した田畑が、自分に反対する者たちによって踏み荒らされようとしていたのですから、パウロの心の痛みがどれほど大きかったかを思います。

しかし、パウロには、ガラテヤの人々に対する信頼がありました。

その信頼は一体どこから来ているのか、続く第5章で明らかにされます。

第5章を学ぶのは来年の1月ですが、パウロのガラテヤの人々に対する信頼、それは、牧者にとって、教会員に対する信頼と同じです。

その信頼は、揺らぐことはありません。

その理由は、神様が選び、語りかけ、この教会に招いているお一人おひとりなのですから。

祈りましょう。